

# 丹波佐吉の狛犬再記載 — 佐野・天神社

磯 辺 ゆ う

奈良文化女子短期大学

## Re-description of a Stone Komainu Made by Sakichi of Tanba: Sano-Ten Yu Isobe

*Narabunka Women's College*

名人石工丹波佐吉の20件目の狛犬を再記載する。本狛犬は奉納年から佐吉の最も古いものになるが、様式上、第V期としたS16摩気神社に先行するものである。両者の形、銘などから奉納時期について考察する。台座、銘は佐吉の既知の石造物の中で最も古く、一方、狛犬自体は最後に近いものと考えられる。

キーワード：石造狛犬、丹波佐吉、江戸時代、滋賀県東近江市、佐野町天神社

### 1. はじめに

幕末期の名人石工丹波佐吉の狛犬は有名で、従来19件が知られるに至っている<sup>1)~5)</sup>。今回記載する20件目の狛犬については、「石造物でめぐる東近江」<sup>6)</sup>に東近江市能登川地区最古の狛犬として挙げられているが、石工名を「灰屋幸助」としており、丹波佐吉と判定されていない。ここに改めて丹波佐吉の作とし、その形態記載と比較を行った。佐吉の狛犬ではないかと連絡いただいたのは、龍谷大学小寺慶昭教授である。奉納年が、従来の最初の狛犬(S1)よりも前になるので、狛犬番号をS0とした。

奉納年は台座に弘化四年と記され、従来知られていた佐吉の最初の狛犬よりも5年前になる。本狛犬は尾の形、全体の様式から京都府南丹市園部町S16摩気神社の狛犬に最も近い。この狛犬には奉納年が記されていないが、その仕上がりから佐吉の最後の狛犬と判断してきた<sup>1)~3)</sup>。今回の狛犬の登場によって、両方について、佐吉の狛犬のどの時期に相当するのかについて考えることにした。

基本的な方法及び型の名称・記号は磯辺<sup>1)、2)</sup>、磯辺・小寺<sup>4)</sup>と同じである。

## 2. 記 載

S0 佐野・天神社（弘化四歳丁未十一月吉日1847、阿：朝日構 奉献、功德主8人の名前、吽：作師 照信花押 朝日構 奉献 功德主7人の名前 石工灰屋幸助）。

滋賀県東近江市能登川地区佐野町。東近江市能登川博物館<sup>6)</sup>。図1、図2、表2、表3、表4。

大型。阿吽とも斜めこちら向き。体高／体長－阿低め（1.2）、吽やや高め（1.3）、体高／胸幅高め。胸の幅は比較的狭くほっそりしている。体高／体長が阿で低めになるのは特に鼻が長く出ているからである。阿吽共雌雄なし。吽の角明瞭。鬣長く、厚みがある－阿：前向き、吽：後ろ向き。目と鼻先間長。耳横に出る、毛流れなし。顎鬚短。犬歯2対。胸紋：すじ。尾：扇、尾の付け根は貫通せず、後面中央渦無し、尾毛束－阿：上向き直毛束5、尾の前面に小直毛束2、側面の渦は左右各1、吽：上向き直毛束5はそれぞれ前面にほぼ同長の直毛束が貼りつきセットになった形、側面の渦は左右各1。毛束の筋は鬣、尾ともに1本。背骨菊紋の数－阿：3、吽：2（阿吽共前の菊紋はほとんど鬣に隠れている）、菊紋の直径－阿：8.7、8.6 cm、吽：8.5 cmと大。後脚後方に阿吽とも渦2、阿：渦の大小なし、吽：大小あり。後脚間の窪め深く仕上げ良好。前脚付け根－阿吽とも左肩が低く、後に下がる。阿吽とも右脚が持ち上がり、右つま先がはっきりと前が出る。

阿の下顎にひび割れ、吽の台座に三角の欠けあり。

狛犬：砂岩、台座Y型：花崗岩、基壇d型：花崗岩。州浜：前後からその足が見えないB型、前後面に彫り模様あり。州浜と台座に杵線あり、基壇に杵線なし。



図1、S0 佐野・天神社狛犬1





図2 S0 天神社狛犬2 ⑧⑨の白三角印は尾前面の付属的直毛束を示す。

### 3. 考 察

S0佐野・天神社狛犬の台座には、弘化四年と書かれており、さらに佐吉の銘もある。これは、宇陀市にある佐吉の最初の狛犬と考えられてきたS1平井・八王子神社よりも5年前のことになる。そのまま佐吉の最初の狛犬と位置付けてよいか、形から考えると大きな疑問がある。以下にその点について考察し、S0佐野・天神社狛犬がどのような性格をもったものかを考えていきたい。

#### 3.1 S0 佐野・天神社とS16 摩気神社

S0佐野・天（以下神社狛犬略）の第一の特徴は、前脚の形と配置である。肘と肩の両方が正確な骨



格をもって表現され（図1-①、④、図3-②）、姿全体も、リアルで、鼻先が長く（特に阿）、細身である。さらに前脚のつま先が左右で大きくずれており（州浜へりからの距離の差 阿：6.6cm、吽：7.3cm）、阿吽とも右足をやや持ちあげている（図1-②、⑤、図3-①）。S16摩気を除く佐吉の他の狛犬でのつま先のずれは、いずれも1cm以内で片脚を持ち上げていない。また、肘と肩の関節がきちんと別々に表現されているものは、佐吉狛犬の中でもS16摩気以外にない（図1-④で明瞭）。非常に気合いを入れたS6興留・素戔鳴、S11柏原・八幡でも、肩と肘はほぼ同じであって、肘から上の上腕骨がほとんど無く、前脚は肘から先で表現されている。これは幕末期の他の石工による狛犬全般と同様で、さらに多くの場合佐吉の曲線的な脚とは違って、まっすぐで棒のようでもある。



図3、S0佐野・天神社狛犬の姿と尾（斜め方向）

図4、S16摩気神社狛犬の姿と尾（斜め方向）

第二の特徴は、毛束の中の筋が1本だけで多数の毛筋を示していないこと、及び鬣の毛束が長く、その先の厚み大きいことである（図-①、④、図2-⑤）。また尾の前面にある付属的な直毛束は、阿で小さく、吽で大きく、尾後面の大きな直毛束と前後に重なっている（図2-⑧、⑨）。鬣の毛については、非常に力を入れており、この狛犬を見た時に強い印象を受ける部分である。阿吽とも毛束は長く、特に阿では大きな渦が顎の下に巻いているのが目立つ（図5-①、④）。

スリムな姿、リアルな脚、長くて厚い鬣と1本の毛筋、前後に重なる尾の直毛束、このような特徴はそのまま京都府園部S16摩気にあてはまる（図4）。ただ、S0佐野・天の尾をよく見ると、阿のものは平板でひよろひよろと上に伸びている感じがあるのに対し、吽になると、もっと全体の形がまとまり洗練される（図3-③、④）。またS0佐野・天では尾の前面にも直毛束があるが、阿吽で異なり試行錯誤している様子うかがえる。一方、S16摩気では尾は臀部に沿って、阿吽で大きな差がない（図4-③）。さらに尾の毛束の先は前後し、長短があって自由である（図4-④）。形としては大きく前進している。

鬣が厚く、筋が1本という点ではS0佐野・天とS16摩気は一致しているが、長さは後者の方がいくぶん短く、流れが整理されている（図5-④、⑤）。さらに鬣の先は、より進んで、胸から浮き上がっている（図5-②）。佐吉が力を入れたに違いない中期の作、S11柏原・八幡と比べても、S0佐野・天とS16摩気の鬣は厚く長いことが明瞭である。S11柏原・八幡では、背中の毛束は薄く、鬣の毛先も立体的になった後徐々に薄くなっていく（図5-③、⑥）。

以上から、S0佐野・天とS16摩気は、同じカテゴリーに属すものと考えてよい。異なる点は、S0佐野・天の尾の形がまだ完成していないことに加えて、顔が拝観者側を向いていること（しかし、あまり強くはない）である（表3）。S16摩気では阿吽の狛犬は向かい合っていて、拝観者側を見ていない。これはこの狛犬独特である。



図5 鬣

全体としては、S0佐野・天はS16摩気に先行するものとみられる。それも長い時間間隔があるのではなく、S16摩気への試作とみてよいだけの近似がある。

一方、最初の狛犬と考えられてきたS1平井・八王子もまた、鼻が長く、鬣の毛束は厚く、毛束に筋が少なく（ただし2本）、リアルな雰囲気を示している（図6）。胸を反り、尾は臀部に沿っている。この類似をもってすると、S1平井・八王子の前に、S0佐野・天とS16摩気があっても悪くないと見えるかもしれない。しかし、その完成度は全く異なるものといえる。特にS1平井・八王子の脚は、肘と肩の分離が不十分で、前後のずれも少ない（図6-①、②、つま先の左右のずれ 阿：0.6 cm、吽：0.2 cm）。第I期S1平井・八王子は、その後に来る第II期から第IV期に至る狛犬に連続しており、佐吉が様々な工夫を凝らして前進していく様子が伺える。しかし、S0佐野・天とS16摩気は他の狛犬とは独立しており、その技術の高さと完成度から、S1平井・八王子の前に来るとは思えない。特に脚の表現については、最初にS0佐野・天とS16摩気までに達していたとすると、佐吉がその後狛犬に大きな努力と前進をみ



せながら、その片鱗をどこにも見せないのは理解できない。これは台座の記述と矛盾する点であり、大きな問題である。

なお、S1 平井・八王子のもう一つの特徴は、可愛さにある。全体に小さいだけでなく、脚が短く、子犬のような印象を与える。



図6、S1 平井・八王子神社狛犬

### 3.2 台座記述－銘と朝日構と奉献

古い奉納年に対し、進んだ形態と見える狛犬の関係について、台座に書かれた「奉献」「朝日構」「銘」から考えてみたい。

台座には、阿吽とも拝観者側正面に奉納主体である「朝日構」、反対側に「構」のメンバー氏名が書かれている。メンバーの氏名は読み取りにくい、ほぼ横いっぱい書かれている。「奉献」は狛犬の頭側に阿吽とも同様に書かれている。さらに吽の台座には、正面「朝日構」の横に佐吉の銘が、尾の側に石工名が、反対側奉納者氏名の右端に奉納年月日が記されている。

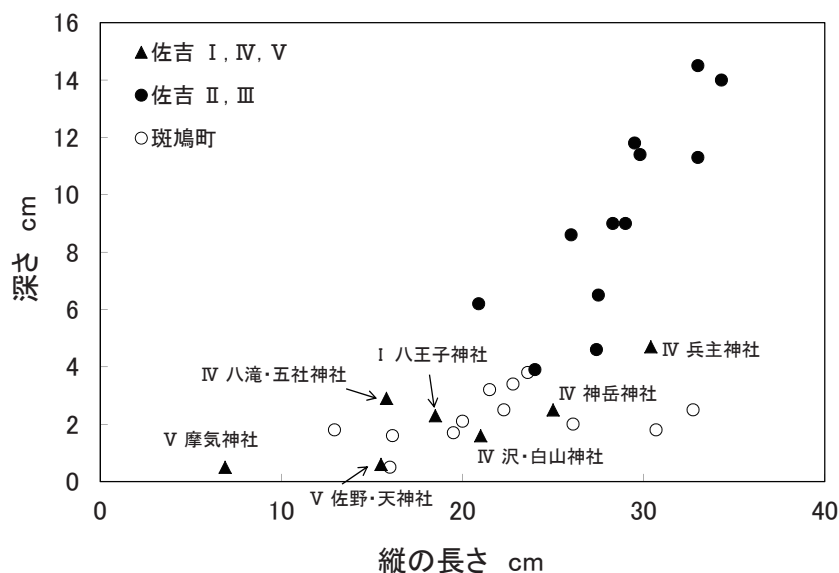


図7 「奉」の縦の長さに対する彫りの深さ  
磯辺<sup>5)</sup> 図5に追加。いずれも阿のデータ

「奉獻」の文字（図2-②）は、普通の佐吉のものとは全く異なる。時期が早いので、まだ佐吉の特徴のある書体<sup>1)</sup>が確立していなかったと考えても、やはり異なる文字だと言わねばならない。彫りの深さを見ると、狭い州浜に彫られているS16摩気を別にして、第I、IV期と比べてもさらに浅い（図7）。第IV期の中で、書体が異なるS13岸和田・兵主以外は、いずれも佐吉以外の石工による彫りで、浅いのである<sup>1)、2)、5)</sup>。

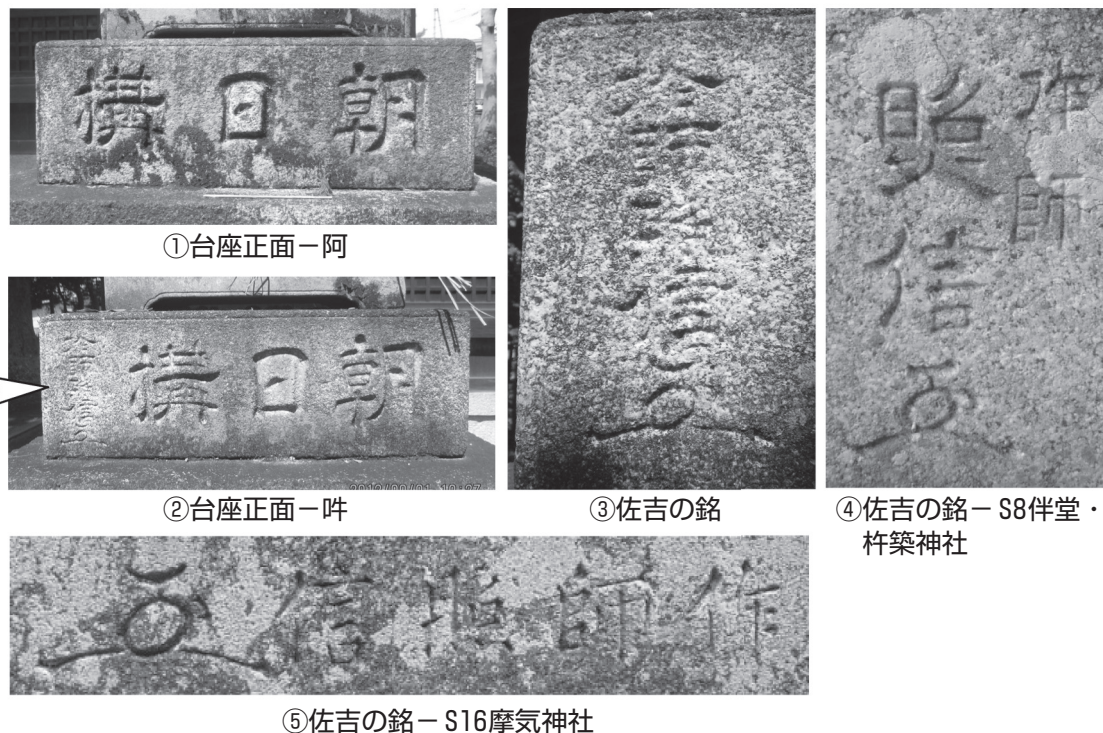


図8 佐吉による銘（三神社）とS0佐野・天神社狛犬台座  
特に記されていない場合はS0佐野・天神社。白三角印は銘を示す。

次に「朝日構」の文字は、阿吽で同様だが、その配置に違いがある（図8-①、②）。阿では、台座の幅いっぱいになるように均等に配置されている。しかし、吽では、向かって右側に寄っていて、左側に銘が入っている。このように台座正面に銘が入るのは、めったにない。通常、狛犬の尾側か本殿側に石工の名前が書かれている。しかし、ここでは本殿側に、奉納年月日および多くの奉納者達の名前が入っていて余地がない。尾側には「石工灰屋幸助」がある。この人は、台座と基壇を合わせて設置したとみられる。「奉獻」もおそらく灰屋幸助によるものであろう。佐吉の銘が正面に入れてある理由は、設置した石工の名前が尾側に入るため、それよりも上位の位置は正面しかなかったということだろう。州浜に銘を入っていない点については、次の項で考察する。

「朝日構」と銘はともに楷書体ではなく（図8-②、③）、その配置から一体のものとも見ることができる。書の雰囲気から、佐吉が全体を書いたように思われる。このような書体はS0佐野・天（銘）、S8伴堂・杵築（銘）（図8-④）、S13岸和田・兵主（奉獻）で使われている。S13岸和田・兵主では本来の狛犬が失われ銘が不明なので、楷書体以外の銘が観察できるものは2件だけである。他はS16摩気神社と同様の楷書である（図8-⑤）。

隷書体のS0佐野・天とS13伴堂・杵築を比べると、やや異なっている部分がある。前者では「照」の脚が「、、、」で、左右の払いが強く、後者では「火」で、全体に運筆がおとなしい。S0佐野・天の目立つ払いは、銘独自のもので「朝日構」には見られない。

このような配置から、佐吉の銘はこの台座製作時から入っていたと考えられる。しかし、台座そのものが、奉納年を古いまま後に作り変えられたということは、考えられないことではない。そのような例が時に見られる。そこで別な角度から台座と狛犬の制作時期を考えてみる必要がある。

表1 佐吉による石造物奉納時期と銘（狛犬と銘が確認できるその他石造物）

製作場所	石造物	奉納時期	西暦	銘	銘の書き方と位置
宇陀市	S0佐野・天神社台座	弘化4年11月	1847	作師照信花押(咩)	台座
	S1平井・八王子神社	嘉永5年9月2日	1852	無	台座
	大師山総供養塔	嘉永5年9月	1852	照信作花押	台座・石祠背
	大師山立江寺石祠	嘉永6年4月	1853	施主但馬朝来郡竹田町住石工大佐吉照信花押・照信作花押	台座
	S2丹生川上神社中社	嘉永6年11月	1853	但州朝来郡竹田町産石工照信作花押(咩)	台座
	S3神楽岡神社	嘉永7年4月	1854	但州竹田産作師照信花押(阿)	基壇
	S4宇太水分神社	嘉永7年9月	1854	作師照信花押(阿)	州浜
	大師山入口永世燈1対	安政2年2月	1855	石工村上佐吉(向かって左)	基壇
	大宇陀法正寺地藏	安政2年4月	1855	但州竹田産作師照信花押	台座
	大師山第1番横地蔵	不明		照信作花押	
	大師山第32番横ひな女	不明		照信作花押	横杵
	S5久米御神社	安政2年11月	1855	作師照信花押(阿)	州浜
	S7醍醐・春日神社	安政3年11月	1856	作師照信花押(阿)	州浜
	大徳寺聖観堂	不明		作師但州竹田産照信花押(記録)*	?台座
	大新屋上山家狐1対	安政4年4月	1857	作人照信花押	州浜
	S6興留・養義鳴神社	安政4年9月	1857	作師照信花押(阿)	州浜
大新屋北山稻荷狐1対	安政5年8月	1858	但馬朝来郡竹田産石工源照信花押	州浜	
S7藤森・十二社	安政5年12月	1858	不明		
S8伴堂・杵築神社	安政6年4月	1859	作師照信花押(咩)・大坂住石工佐吉(咩)	台座	
S9下永・八幡神社	安政6年9月	1859	作師照信花押(阿)・大坂住石工佐吉(咩)	州浜・台座	
S10永原・御霊神社	安政7年・万延元年3月	1860	照信作花押(阿)	州浜	
S19西・蛭子神社	万延元年9月	1860	無		
S18八滝・五社神社	万延元年	1860	■照信花押(咩)	州浜	
S11柏原・八幡神社	文久元年5月	1861	作師村上源照信花押(阿)・石匠照信花押(咩)	州浜・州浜	
S12沢・白山神社	文久元年12月	1861	無		
S13岸和田・兵主神社	文久2年11月	1862	作師照信花押(記録)*2	州浜	
S14神岳神社	文久3年9月	1863	作師照信花押(咩)	州浜	
S15阿波神社	破壊		作師照信花押(阿)	州浜	
S0佐野・天神社狛犬			無		
S16摩気神社	不明		作師照信花押(阿)	州浜	
大新屋上山家不動明王	慶応2年2月	1866	作人但州竹田産村上照信花押	州浜	

注1) 狛犬をゴチック、その他を明朝体で示した。佐野・天神社は台座と狛犬を分けている。狛犬は摩気神社の前に置いた。

注2) 佐吉が製作していた大まかな場所(推定)別に点線の区切りを入れた。

注3) 銘の書き方 | : 縦書き、— : 横書き

注4) 銘の位置、その位置の呼び名がわからない場合空白

注5) \*1 : 金森<sup>7)</sup>、\*2 : 奈良文化財同好会<sup>8)</sup>による。



### 3.3 時期の検討

佐吉の狛犬と、銘が確認できるその他の石造物について、銘の内容とその場所を表1にした。S0佐野・天の台座と狛犬は分けている。台座は書かれている奉納年通りに、狛犬はS16摩気の前にとりあえず置くことにする。

大宇陀時代（宇陀市）の多くの銘は台座、基壇、その他へ縦書きである。ただし、狛犬以外のものが多く、その場合、縦書きが多いともいえる。しかし、狛犬でもS2丹生川上、S3神楽岡は基壇あるいは台座に縦書きである。S4宇太水分から州浜に横書きとなる。大宇陀を離れてから、すなわちS17(S5-S6)醍醐・春日以降はほとんどが州浜に書かれ、横書きが多い。つまり佐吉の石造物の中後期では、台座に縦書きは特殊な場合と見ることができる。狛犬の場合S8伴堂・杵築であるが、これは、S11柏原・八幡に向かって新たな狛犬を創造するために、古典に帰ったというイメージの狛犬である<sup>1)~3)</sup>。奉納者としての「石工佐吉」の他に、作者の銘としての「昭信花押」もまた台座に縦書きとなっているのも、そうした気持ちからであろうか。次のS9下永・八幡では、作者としては州浜に横書き、奉納者としては台座に縦書きとなっている。

他の石工の場合、台座あるいは基壇に書かれており、州浜に書かれているのを筆者はまだ見かけない。通常、台座あるいは基壇に書くのだが、佐吉は、S4宇太水分の狛犬を作る時に、州浜に銘を入れることを思いついたのではないだろうか。ここの台座にはぎっしりと奉納者の名前が刻まれており、自分の銘を入れるにあたって、場所を考える必要があったのだろう。

すると、S0佐野・天神社の銘が台座に書かれているのは、州浜に書くという発想がまだなかったと考えることもできる。しかし、これだけではまだ時期の決定には不十分なので、次に「照信」の「信」を検討してみよう。

図9を見ると、初期と晩年に近い頃では書体に変化していることに気づく。それぞれの奉納時期については表1を参照されたい。初期大師山立江寺から法正寺まで、つまり大宇陀にいた頃の一番大きな特徴は、人偏の払いが縦棒に対して強く深く大きいことである。文字はやや横長である。その後縦長になり、人偏の払いは徐々に小さくなっていく。S11柏原・八幡は大いに力を入れて作った狛犬であるが、払いはかなり小さく、明らかに第Ⅲ期のS9下永・八幡からS18八滝・五社までと同じグループに属している。第Ⅳ期S14神岳は病気の頃と推測され<sup>3)</sup>、一層縦長の弱い文字である。上山家不動明王は最後の作品で、州浜の幅いっぱい多数の文字を書いているので狭くなっている。この中で、S16摩気は、病気と思われるS14神岳より人偏の払いがやや長いものの、明らかに最初ではなく終りのグループに入れてよい。なお、S15阿波は、時期不明のもので、尾から第Ⅳ期に入るが、この文字で見ると限り第Ⅱ期の終わり頃のS6興留・素戔鳴に近い力強い文字である。S15阿波の時期の検討が必要である。書体の異なるS0佐野・天とS8伴堂・杵築の「信」を見ると、前者の人偏の払いは縦棒に比べて大きく、全体に平たく、佐吉の初期の「信」に通ずるものがある。一方、第Ⅲ期に属すS8伴堂・杵築は、払いよりも縦棒の方が長く、確かに中期の特徴を備えている。

このように「信」の字からもS0佐野・天の台座の銘は佐吉の初期に属すと考えられる。一方、狛犬は、その様式から明らかにS16摩気のすぐ前に来るものでその習作であったと考えるのが妥当である。そしてS16摩気は、州浜にある銘から佐吉の初期ではなく晩期に入るので、S0佐野・天の狛犬も晩期

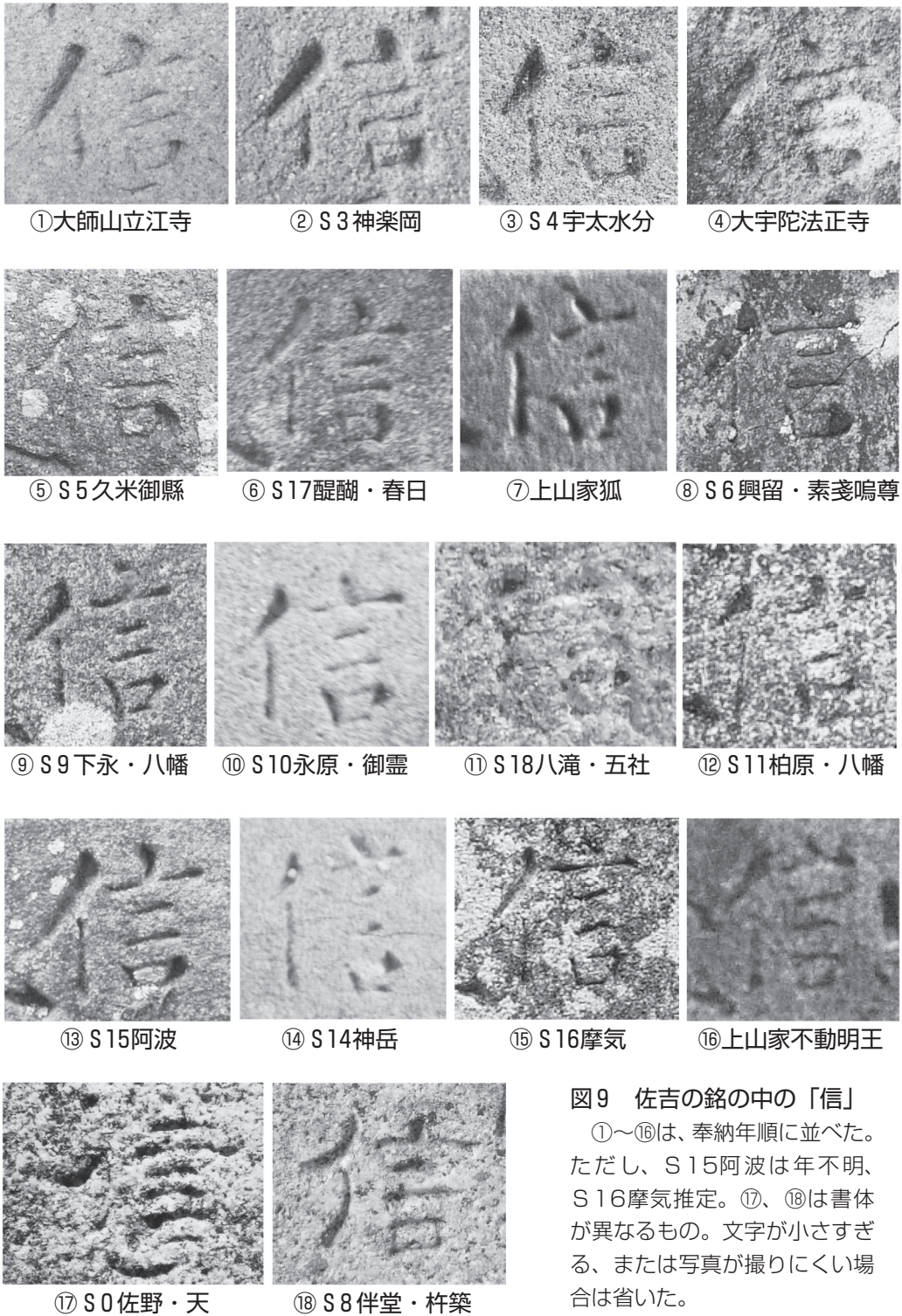


図9 佐吉の銘の中の「信」

①～⑯は、奉納年順に並べた。ただし、S15阿波は年不明、S16摩気推定。⑰、⑱は書体が異なるもの。文字が小さすぎる、または写真が撮りにくい場合は省いた。

に作られたと判断できる。すなわち狛犬と台座の製作時期が異なっていると考えられるのである。

佐吉は狛犬以外のものでは、「作師」と称しないことが多い(表1)。一方、狛犬では、従来「作師」とするのはS3神楽岡からであった。それ以降の狛犬では、S永原・御霊で「照信作」とある以外はいずれも「作師」である。その中でS8伴堂・杵築とS9下永・八幡で「石工佐吉」とあるのは、奉納者



の名前としてであり<sup>2)</sup>、作者としての銘では別に「作師」と書かれている。そして今回、S3神楽岡よりも7年早く、「作師照信花押」という典型的な佐吉の銘が登場したのである。台座が、確かに書かれている通りの時に奉納されたものとする、佐吉は、この銘を従来知られていた時期よりもかなり早くから使い始めていることになる。

### 3.4 狛犬の大きさ、様式

大きさ、様式の比較にあたって、S0佐野・天の狛犬は、今までの検討により最後の第V期に入れ、時期不明のS15阿波はとりあえず第IV期の最後に入れておくこととする。S0佐野・天は、大きさ、体形とも全体にS16摩気に近いといえる(表2)。大きい部類に入るだろう。第V期S0佐野・天とS16摩気は、体高/体長ではともに1.2で、第IV期のずんぐりしたタイプと同じであり、体高/胸幅(2.4、2.3)は第III期の細身で背の高いグループに近い。姿を見る限り、スリムで決してずんぐりタイプではない。体高/体長の値が低いのは、阿の場合特に鼻が前に出ているために、測定体長が長めになっていることによるのだろう。昨では、鼻がそれほど出ていないので、この値は1.3と幾分高くなる。体高/胸幅も2.5とより高い。同様にリアルな雰囲気第I期S1平井・八王子は小型であるが、体長に比べ背が高く、しかし、胸幅で見ると第III期ほど細身ではない。これは、特に背が高いというよりは姿勢がぐっと反りかえっていることによるものと見える。

表2 狛犬の大きさ(阿像 単位cm)

期	狛犬番号と神社		狛犬						尾	
			全長	体長	体高	胸幅	体高/体長	体高/胸幅	縦	縦/横
第I期	S1	平井・八王子神社	37	30	46	21	1.5	2.2	27	1.5
	S2	丹生川上神社	63	54	65	33	1.2	2.0	53	1.6
第II期	S3	神楽岡神社	74	66	76	35	1.2	2.2	47	1.5
	S4	宇太水分神社	80	64	81	40	1.3	2.0	54	1.3
	S5	久米御縣神社	70	53	72	35	1.4	2.1	51	1.7
	S17(S5-S6)	醍醐・春日神社	70	56	71	34	1.3	2.1	46	1.3
	S6	興留・素戔鳴神社	72	62	83	34	1.3	2.4	55	1.2
	S7	藤森・十二社	66	60	69	28	1.1	2.5	47	1.5
第III期	S8	伴堂・杵築神社	73	69	93	36	1.4	2.6	65	1.8
	S9	下永・八幡神社	75	65	89	38	1.4	2.4	58	1.5
	S10	永原・御霊神社	64	59	75	31	1.3	2.4	64	2.7
	S19(S10-S18)	西・蛭子神社	80	68	79	32	1.2	2.5	51	1.6
第IV期	S18(S19-S11)	八滝・五社神社	64	56	66	30	1.2	2.2	45	1.3
第III期	S11	柏原・八幡神社	64	52	71	30	1.4	2.4	33	0.8
第IV期	S12	沢・白山神社	64	52	64	30	1.2	2.1	42	1.3
	S13	岸和田・兵主神社	75	69	85	35	1.2	2.4	56	1.4
	S14	神岳神社	60	54	65	31	1.2	2.1	44	1.3
	S15	阿波神社	52	44	60	25	1.4	2.3	35	1.1
第V期	S0	佐野・天神社	69	59	70	30	1.2	2.4	44	1.4
	S16	園部・摩気神社	73	62	73	32	1.2	2.3	45	1.6

注1 全長：鼻から尾の後端まで、体長：鼻から胴または後足の後端まで、体高：前脚下端から頭上端まで、胸幅：胸の最大幅。

注2 S7とS13は平成に再建されたもの。以下表3、4も同様。

注3 磯辺<sup>5)</sup>表2にS0を付加し佐吉作以外のものを省略。

表3 佐吉狛犬の特徴

狛犬番号	期	尾	顔向き	目鼻間	顎鬚	鬚流れ方向		耳	胸のすじ	犬歯	胸紋	背骨紋	後脚後方渦
						阿	吽						
S1	I	0	斜めこちら向き	長		前	前	平	無	1	無		
S2						前	前			2	阿		
S3	II	Y		中	短	前	前	有	2		吽	?	菊
S4						前	後						
S5	後	前		中	長	後	後	流れ	無	1	菊	1	
S6	後	後				1	無						丸
S17(S5-S6)	後	後		短	長			後	後	平	1	無	
S7	後	後				III	H	前	前				2
S8	後	後		IV	YU			後	後	流れ	無	?	
S9	後	後				III	H	後	後				平
S10	後	後		IV	YU			後	後	流れ	無	?	
S19(S10-S18)	後	後	IV			YU	後	後	平				1
S18(S19-S11)	後	後		III	H		前	前		流れ	無	?	
S11	後	後	IV			YU	後	後	平				1
S12	後	後		IV	YU		後	後		流れ	無	?	
S13	後	後	IV			YU	後	後	平				1
S14	後	後		IV	YU		後	後		流れ	無	?	
S15	後	後	IV			YU	後	後	平				1
S16	後	後		V	0		長	短		平	有	2	
S0	阿吽正対	中	前			前							

注1 尾の型 0：扇、Y：ヤツデ、H：炎流れ毛、YU：ヤツデ渦  
 注2 S8の背、脚等に多数の菊紋があるが、胸にはない。  
 注3 磯辺<sup>5)</sup> 表3にS0を付加し、大きさに関わる2項目を表2と重複するため省略。  
 注4 ?は平成作には無いが元来は不明。  
 (各特徴の詳細は本文及び磯辺<sup>2)</sup>を参照。)

表4 佐吉狛犬及び参考狛犬の州浜、台座、基壇の特徴

狛犬番号	期	州浜		台座		基壇		石材		
		型	模様	型	枠線	型	作者	狛犬・州浜	台座	基壇
S0台座				Y	○	d	他	砂岩	花崗岩	花崗岩
S1	I	A	4面模様つき	X	-	a	他	土地の石	土地の石	土地の石
S2		B		X	-	-		赤石	赤石	-
S3	C	X'		◎	b	赤石		赤石	赤石	
S4	C	X'		◎	b	赤石		赤石	赤石	
S5	II	C		Y	○	b		赤石	赤石	赤石
S17(S5-S6)		D		Y	-	c1		他	砂岩	花崗岩
S6	C	Y		-	c2	龍田石工		砂岩	花崗岩	花崗岩
S7	不明	Y		-	b	不明		花崗岩	花崗岩	
S8	III	C		Y	○	b		砂岩	花崗岩	花崗岩
S9		C		Y	-	b		砂岩	花崗岩	花崗岩
S10	C	Y		-	b	砂岩		花崗岩	花崗岩	
S19(S10-S18)	C	Y	-	c2	和泉屋	砂岩	花崗岩	花崗岩		
S18(S19-S11)	IV	C	Y	-	b	他	花崗岩	赤石	赤石・花崗岩	
S11	III	C	Z	○	b	柏原石工	砂岩	砂岩	花崗岩	
S12		C	Y	-	d	他	砂岩	花崗岩	花崗岩	
S13	IV	不明	Y	○	b	不明	花崗岩	花崗岩		
S14		C	Y	-	d	他	砂岩	花崗岩	花崗岩	
S15	C	Y	-	b	他	砂岩	砂岩	花崗岩		
S0狛犬	V	B	前後模様つき							
S16		B	前後模様つき	Y	-	a	土地の石	土地の石	土地の石	

注1 枠線 ○：あり、◎：多くあり、-：なし。  
 注2 c1、c2の数字は段数。  
 注3 磯辺<sup>5)</sup> 表4にS0を付加。台座と狛犬を分けてある。  
 (型の詳細は磯辺・小寺<sup>4)</sup>を参照。)



尾、目鼻の長さ、顎髭、耳などでも最初の第Ⅰ期と最後の第Ⅴ期が似ていることが表3から浮かび上がってくる。ただ、後脚の後方の毛については、初期とⅤ期では相違があり、毛が後に流れるものから、渦ができ、その数が1から2へ増加する傾向が見て取れる。

州浜の形もS0佐野・天はS16摩気と一致して、頭側からは足部が見えないB型<sup>4)</sup>で、佐吉の初期S2丹生川上にも見られる型である(表4)。ただ、前後(頭尾)に模様がついている点が初期とは異なる。

台座は、初期に多いX、X'型ではなく、S5久米・御懸以降定番になった単純に四角いY型である。さらに基壇は、佐吉狛犬では珍しい四隅に柱のような構造を持つd型である。台座と基壇がYd型のものは、S12沢・白山とS14神岳であり、いずれも佐吉ではなく他の石工によるもの(表4)である。今回のS0佐野・天もYd型になっているのは灰屋幸助によるためと考えるのが妥当である。台座、基壇の石材もよく使われている花崗岩である。

結局佐吉自身の台座の型は、X型からスタートしていると見られる。また基壇をa、b以外の型にするのは佐吉以外の石工の時であることが表4からわかる。

### 3.5 木造狛犬との関係

今回の狛犬について、台座は現在知られている佐吉狛犬および石造物の中で最初のもので、狛犬自体は佐吉の最後の第Ⅴ期に属することがわかった。そして、佐吉の最初(第Ⅰ期)と最後(第Ⅴ期)の狛犬は、互いに似たところがある。しかし、それは連続しているわけではなく、似ている理由は、恐らく参考にした狛犬が同様なものだからだろう。

S1平井・八王子の毛束の特徴は木彫狛犬に見られるもので、その観察から由来するものと考えられる。佐吉は、石仏でもリアルな表現をよくし、細かな細工が得意であった<sup>3)</sup>。従来よくある石仏よりも、金属製や木彫の仏像に近づこうとしていた様子がうかがえる。そこで、狛犬についても、従来からよくある型の石造狛犬ではなく木彫狛犬を目指したと考えられる。木は石に比べて彫りやすいために形に自由度が高く、木彫狛犬と石造狛犬は違った表現がなされる。毛流れも豊かに表現されることが多い<sup>9)</sup>。S0佐野・天に最初に奉納されたものがどのような狛犬だったのか不明だが、S1平井・八王子の様子から、やはり木彫狛犬風だったのではないかと思われる。その後様々な努力と変遷を経て、佐吉は最後に再び木彫狛犬に帰ってきたと考えられる。その結果として、最初と最後の狛犬が似ているのである。

佐吉(数え49歳)は元治元年(1864)、渾身の役の行者像を大坂舍利尊勝寺に奉納した。これは泉州で病を癒して後のことである<sup>3)</sup>。その後、佐吉は新たな依頼を断って大坂を後にしたらしい<sup>3)</sup>。その後予定されるのは最後の狛犬となるべき摩気神社への奉納(奉納年不明)である。京あたりでその構想を練っていたのだろう。そこで、若い頃に関心を寄せた木彫狛犬を再び捉えようとしたのではないだろうか。

京都府、滋賀県には今も優れた木彫狛犬が残されている<sup>9)</sup>。当時はもっと多くあったかもしれない。しかし第Ⅴ期の狛犬の出来栄えから判断して、佐吉は良いものを求めて、現在文化財となっているレベルのものを歩いて想像できる。京都市内では八坂神社、高山寺の狛犬が代表である。現在はめったに見ることができないようになっているが、当時はいくらかでも観察できる状態だっただろう。

八坂神社、高山寺の狛犬は、ともに鎌倉時代の仏師の作で、胸をはり、片足を大きく前に踏み出し、

厚みのある鬣の毛束が首の回りを豊かに流れている<sup>9)</sup>。高山寺のものは湛慶作と考えられ、動きのある中に可愛らしさをもっており、この形はこれ以降「湛慶様」として受け継がれた<sup>9)</sup>、<sup>10)</sup>。八坂神社のものも、運慶作かと伝えられているが、「湛慶様」の典型とされている<sup>11)</sup>。鎌倉時代の木彫および石造狛犬は他にもあるが（石造では東大寺南大門のものが代表）、それぞれ独特であり<sup>9)</sup>、佐吉の狛犬に似ているのは「湛慶様」の狛犬である。S1平井・八王子の狛犬は、石である不自由さを別にすると、鬣の表現、リアルさ、その中に漂う可愛らしさが、いかにも「湛慶様」である。佐吉はここではまだ、片足を大きく踏み出したり、鬣の先を浮き上がらせたりしていない。それはそこまで石を彫ってできなかったということであろう。

その後、通常の狛犬に近い形に接近しながら、「佐吉風」を確立していった。しかし、最後の飛躍が、より一層自由な表現に至ったようである。技術も十分に、心も病を経て、より透明な境地に達した上で<sup>3)</sup>、おそらく、高山寺、八坂神社の狛犬（と言ってもよいくらいのできだと思える）を一層よく捉えたのではないだろうか。

## 4. おわりに

S0佐野・天の台座の記述から、佐吉最初の狛犬が従来考えられていたよりも早く弘化4年に奉納されていたこと、その時既に佐吉は「作師照信花押」を使っていたことが判明した。それにより彼の名声が高まっていた時期を早める必要が出てきた。また大宇陀時代までの間に他にも多数の石造物を残していたに違いないので、今後発見される可能性が大きくなったわけである。

佐野町天神社に最初に奉納された狛犬は壊れてしまったか、あるいは佐吉が自分の作品として納得のいくものを改めて奉納したいと考えたか、あるいは、摩気神社のために習作を作ったところ、何らかの理由で先の狛犬を失っていた地元の人に乞われて譲ったなど様々に考えられる。S0佐野・天（現在の狛犬）が、S16摩気の習作的要素を持っていることから、納得のいくものを奉納するという理由だけではなさそうである。残念ながら文献調査からは、壊れたという推測をできるまでには至らなかった。なお、能登川地区で確認された中で最古の狛犬<sup>6)</sup>はこの佐野町天神社の最初の狛犬であるが、狛犬と台座の奉納年がずれていることに関して、もうひとつ興味ある事例がある。同地区第二に古い狛犬である大浜神社の場合にも、狛犬台石（狛犬とは別材）に「文久四甲子年正月」（1864）、台座に「文久二壬戌年」（1862）と、ずれがあるのである<sup>6)</sup>。佐野町天神社の現在の狛犬の奉納は、摩気神社との関係から恐らく大坂で佐吉が舍利尊勝寺に役の行者像を奉納した元治元年5月（1864）以降、最後の上山家不動明王（慶應二年1866）の前のことと推測される。それは大浜神社狛犬台石（1864）の後2年以内のことである。大浜神社狛犬のずれの理由は不明であるが、興味深いことである。

なお、佐野町天神社（境内にある社歴によると10世紀創建の伝、大正5年に改築される前の本殿は室町時代のもの）に、能登川地区で既知最古の狛犬が佐吉の銘をもって奉納されていることについては、琵琶湖の湖上交通の他に、織田信長が近くに安土城を築いて後、内陸を通る中仙道とは別に湖岸に近い浜街道が発達して賑わったこと<sup>12)</sup>が大きな要素であろう。佐吉の狛犬の多くは、かなり由緒ある立派



な神社、あるいは当時経済的に有力だった地域の神社に奉納されていることが多いのである。

ともあれ、突然変異のように現れていたS16摩気の前駆狛犬があったことで、佐吉狛犬の全体像がよりよく理解できることになった。

## 謝辞

狛犬を発見し、お知らせ頂いた龍谷大学小寺慶昭教授に深謝の意を表します。また文献の調査に当たって、東近江市立能登川図書館、同八日市図書館、同埋蔵文化財センター東近江市史編纂室の皆様には、大きな協力を頂き、助けられたことを記して深く感謝します。

## 引用文献

- 1) 磯辺ゆう (2007) 丹波佐吉の狛犬1－記載. 奈良文化女子短期大学紀要38: 19-30.
- 2) 磯辺ゆう (2007) 丹波佐吉の狛犬2－考察. 奈良文化女子短期大学紀要38: 31-42.
- 3) 磯辺ゆう (2008) 丹波佐吉の石造物とその一生. 奈良文化女子短期大学紀要39: 1-38.
- 4) 磯辺ゆう・小寺慶昭 (2009) 丹波佐吉の新発見狛犬－醍醐・春日神社. 奈良文化女子短期大学紀要40: 29-39.
- 5) 磯辺ゆう (2010) 丹波佐吉の狛犬再記載－八滝・五社神社. 奈良文化女子短期大学紀要41: 23-34.
- 6) 東近江市能登川博物館「第72回企画展 石造物でめぐる東近江」東近江市能登川博物館. 24pp.
- 7) 金森敦子 (1988) 旅の石工－丹波佐吉の生涯. 274pp. 法政大学出版局.
- 8) 奈良文化財同好会 (1999) 狛犬の研究－大阪府の狛犬－. 165pp. 奈良文化財同好会.
- 9) 大津市歴史博物館編 (1999) 動物彫刻の世界－宗教美術の脇役たち－. 79pp. 大津市歴史博物館.
- 10) 上杉千郷 (2001) 狛犬の事典. 366pp. 戎光祥出版.
- 11) 京都国立博物館編 (2002) 祇園・八坂神社の名宝. 119pp. 八坂神社.
- 12) 能登川町高校町史研究委員会 (1976) 能登川町史. 能登川町.

